

ベトナムの家族・親族と近代化に関するレビュー

岩井美佐紀

1. はじめに

ベトナムは歴史的にインドと中国の文化の影響を受け、東南アジア的要素と東アジア的要素の両方を併せもつ社会である。また54の民族によって構成される多民族国家ということでは、人口の大多数を占める父系結合のキン族とは異なる双系的・母系的な親族構造をもつ民族も多数存在する。

ベトナム民族のルーツはベトナム北部紅河中流域にあり、今でも伝説上の雄王を祀る神社があることから、ベトナムの故地とされる。ベトナム人は、長い中国隷属の歴史から、北部地域では儒教的な思想を受容し、家族・親族組織も、中国の宗族や韓国の門中のようにゾンホとよばれる父系血縁集団によって構成される。一方、ベトナム民族の南進、すなわちベトナム領土の拡大によってチャムやクメールなどの母系・双系的社会との交わりのなかで形成された移住社会は、中心部から離れるにつれより柔軟的で非東アジア的な要素を強め、その家族形態は双系的で緩やかな親族・家族圏という東南アジア的要素の典型的類型特徴をもった。

このようにベトナムの家族と一言でいってもその歴史的文化的そして地理的要素によって構造的に異なっていることを前提に議論しなければならない。主にここでは、ベトナム人口の大多数を占めるデルタ農村における家族を考察の対象とすることから、北部紅河デルタ社会と南部メコンデルタ社会に大別し、その家族・親族の特徴と近代化による変容について先行研究に基づきまとめてみたい。アメリカの文化人類学者エンブリーが双系的なタイ社会を日本の農村社会との比較でルースな構造の社会と述べたことに因み、本論では南部ベトナム社会をルースな社会、一方北部ベトナム社会をタイトな社会と規定しておこう。

以下に明らかになることであるが、日本におけるベトナムの家族についての研究は主に文化人類学的アプローチが中心で、地域的には北部が圧倒的に多いという偏りがある。またベトナム社会の変化、とくにドイモイのインパクトやジェンダーに関しては社会学、歴史学、経済学的アプローチが中心となるが、それぞれの問題関心や分析方法が異なるためか、相互に関連性のない印象が強い。そのため本論における先行研究のレビューもその性格を免れない。家族・親族とその変化という両者をつなぐような学際的で総合的な研究はもうしばらく先のこととなるかもしれない。

2. 北部：タイトな社会、父系親族ゾンホ

まず、北部紅河デルタ農村の家族・親族をみてみよう。多くのベトナム研究者

が言及するように、紅河デルタ地域は稲作の歴史が古く、「王法も村の垣根まで」という諺があるように極めて封鎖的で自律的な村落社会を形成してきた。その村落内地縁結合の強さは、そのまま父系親族組織による血縁結合によって裏打ちされてきたことは周知の事実である。すなわち父系親族組織は村とのかかわりで論じられ、その活動は村を中心に小規模になされている。中国や韓国における血縁集団がしばしば移住先の都市や外国においてみられる現象であるのに対し、ベトナムではそのような動きがほとんどみられていない [嶋尾 2000]。

それでは北部村落における親族構造の特徴を末成 [1998] に基づいて概観しておこう。末成は、北部ベトナムにおける父系親族組織ゾンホ dong h (氏族の流れの意) の性格が、儒教規範の強い中国や韓国の父系親族組織に比べ、曖昧であることを指摘している。たとえば、族長がそれほど大きな権限を持たず祭祀の主催者としての責任や役割が明確ではないということや、家譜とよばれる一族の族譜が、始祖からの系譜的つながりを示したのではなく、自己に近い祖先の事績を記したのものや、忌祭と墓祀りの防備録のような簡単なものが多いことである。また、その内容や長短においても偏差が激しい。すなわち、ベトナムの家譜には、始祖から世代を通して自身にいたるまでのリネージを確認するための祖先中心型だけでなく、自己中心型の系譜認識も共存するような特徴があることが指摘されている。また、外族の祖先を祀ったり、娘を生家で祀ったりする例も存在することから、実態レベルでは双系的な特徴もみられる点で、父系親族集団といっても、その性格はより原理主義的な中国や韓国の場合と異なることも明らかにされ、大変に興味深い。このようなベトナムのゾンホのあり方を、末成は中国の影響だけにその起源を求めず、女性の地位の高さや母方・妻方との密接な関係とも両立しうる父系制として捉えている。その妥当性のほどは現時点では定かではないが、ベトナムの親族構造を考えるうえで重要な議論となるであろう。ただ、ゾンホだけを考察の対象とすれば、その機能・役割の分析には制約もでてこざるを得ない。すなわち、村落社会のなかでゾンホがどのような役割を果たしているのかという面をみないと、一面的となろう。また、通時的にみなければ、その機能の歴史的变化を明らかにすることができない。農業集団化時代、土地が共有化され、また女性の社会進出が促進された結果、ゾンホがどのような影響を受けたのかは極めて重要な論点になるであろう。

次にマラーニー [1998] は、1950年代以降の社会主義化のプロセスで北部村落における婚姻と結婚式の形式がどのように変化したのかを考察している。マラーニーは、婚姻法の制定など、一連の社会主義政権の改革によって伝統的に「家族の事柄」である婚姻や結婚式が、家族の手から離れ、国家権力に管理されるものへと変化したことを明らかにしている。とくに大きく変化したのは、近代的な婚

姻法の導入による婚姻の承認方法である。それまで婚姻は、親の決定に基づき、村落内の一族のプレステージを誇示する華美で浪費的な結婚式によって社会的に承認されたが、改革後の婚姻は夫と妻の自由意志に基づく婚姻登録によって公的に承認された。それにもなあって、結婚にかかわる様々な儀礼慣行も簡略化され、婚礼の司祭は新郎新婦の両家ではなく、村の人民委員会（役場）や共産党組織の幹部、あるいは村の青年団（共産党の下部組織）が執り行うことになった。家父長的な家族意識や婚礼の華美で儒教的な要素は、このような改革によってかなりの程度薄められ、その役割も大きく縮小したということである。この点は、中国の場合とかなりの部分が共通しているのではないか。

しかしながら気になるのは、共産党の政策の実施過程をみる際に、マラーニーは地方官吏、青年団を村の家族と対抗的に位置づけている点である。党幹部や青年団員は、決して村外の間人ではなく、自身も村の家族の一員であり、党の政策の積極的な推進者としての側面ばかりではない。

さて、ベトナム北部農村において1958年から1988年までの農業集団化は家族の役割・紐帯を希薄化させたのだろうか、それともそれほど変えなかったのだろうか。1945年の独立まもなく遂行された急進的な土地改革を経て農業集団化に入った北部ベトナムでは、伝統的な村落共有田や族田とよばれる氏族の祭祀用の土地が消失し、さらに地主や富裕な富農層の土地から自作農の土地まですべてが共有化された。ゾンホの活動の経済的基盤が失われたことは、有力ゾンホに大きな打撃を与え、その活動範囲を制限したといえるであろう。当時、封建的な慣習や建造物は社会主義建設にとって障壁になると考えられ、マラーニーが指摘するように、排斥や打倒の対象となった。一方で、岩井 [1995] が論じるように、1960年に家族法が制定されて以降、家族計画（産児制限）が普及し、合計特殊出生率も低下するようになった。詳細は後述するが（4. ジェンダー）、それによって世帯の規模は小さくなり、基本的に夫婦と未婚の子供によって構成される核家族が主流となった。儒教的な家族規範を再生産する装置も経済的基盤もなくなり、氏族の族長のプレステージを維持することが極めて困難な状況が生まれたが、集団化時代の平均主義的な分配システムは世帯間の収入の格差を抑制し、結果的に世帯（すなわち、核家族）の平準化が促進されたといわれている。

3. 南部：多民族構成、ルースな社会、双系的家族圏バーコン

前述したように、メコンデルタを中心とする南部における家族・親族構造は、北部の東アジア的な父系親族を中心としたものとは異なり、東南アジア特有の双系的な親族構造を有している。その現れ方は、先住民族のクメール人の土地にベトナム人が移住し、混住・混血社会を形成していったという歴史的背景が大きく

影響している。

中西 [1998] は、メコンデルタのベトナム人とクメール人の混住地域である、ソクチャン省のある村における家族・親族構造を研究し、大変興味深い結果を提示している。とくに、中西の調査地はキン族23.6%、クメール72.8%、華人 3.5%という、まさにクメールの方が多数派を占めている地域であり、ベトナムでありながら、極めてユニークな社会状況を生みだしている。世帯は核家族中心で、両親とは、末の男子または女子が同居する傾向があり、妻方居住も多い。家族構成は、1つの世帯の子供が結婚し新たな核家族を形成するにしたがい漸次分出し、実家の隣や周囲に新しく家屋を増やしていくパターンが多い。親族関係は、バーコンba con（祖母と子供の意）と呼ばれる双系的関係が中心で、祖先祭祀は基本的に父系的ではあるが、実際は双系的な先祖が祭祀対象となる。このような性格は、中西も指摘するように、東北タイのルースな双系的家族結合形態である「屋敷地共住集団」 [水野 1981] に極めて近い。このようなメコンデルタにおけるキン族親族構造の東南アジア性は、クメール人との接触による結果なのか、広大な荒蕪地への入植形態に適応した結果なのかは明らかではないが、キン族の数世紀にも及ぶ南進という移住プロセスの下で彼らの文化的社会的要素が変容した結果であることは確かであろう。

同様にメコンデルタのカントー省の農村で臨地調査をした渋谷 [2000] も、流動的で開放的な移民社会である南部村落においては家族が社会の基礎単位をなすだけでなく、社会そのものを形成すると指摘している。これは、国家と家族の間を媒介する社会構成単位がほとんど存在しないという東南アジア的特質を現している。そのような社会では、規範としての儒教的道徳はあるものの、実態としては極めて状況選択的に相続や居住形態が決定されている。たとえば、長男が家長として家族の祭壇を継承し親と同居する責任を負う北部村落とは異なり、南部社会では末の息子が結婚後生家で両親と同居し土地などの財産もより多く相続する。タイのように妻方居住が一般的な社会では末娘が親の家と土地を相続するが、父系血縁関係が規範的に優勢な南部ベトナムでは双系的ではあっても末息子が相続するといった点で、共通点と相違点がみられて興味深い。さらに家族計画が浸透せず、10人兄弟が一般的な南部の家族関係はどちらかといえば個人主義的で、北部のゾンホのように自身のアイデンティティの源になるような凝集的な社会集団が形成しづらい特質をもっていることも指摘されている。

4. ドイモイ（市場経済化）のインパクト

1986年末から開始されるドイモイ政策（経済開放）は、1975年以前には資本主義的な経済体制をとってきた南部よりも、長らく閉鎖的な社会主義統制経済体制

をとってきた北部社会に大きなインパクトをもたらした。

まず、北部において「家族」の意義が強調されたのは、1988年の農業面のドイモイ政策とよばれる農業経営管理システムの刷新にともない、農地が家族単位で均等に分配されたことである。このことをもって「家族の意義がみなおされた」という評価を受けることが多い。たしかに土地の所有形態は共有制から私有制にかぎりなく近づき、農業経営は家族に任されることになった。しかし、家族の役割は、集団経営時代から個別経営時代まで大きく変わったわけではない。岩井 [1999] は、生産は共同作業であっても、収入・消費単位は世帯でありつづけたこと、中国のような自然村レベルを超えた大規模な人民公社までいらず、農業生産合作社は本来の村落共同体の機能を代替していたことを指摘している。ただ社会主義的農業システムのなかで女性労働の社会化を促すためにつくられた村の託児所はドイモイ以降解体し、元託児所スタッフが自宅で乳幼児を預かる個人託児システムに取って代わられた。農業も個別世帯単位となり、農外就労機会も増えた農家では、年配女性も商売などに忙しく孫を預からないため、このような個人の託児所がいたるところにみられる。

このようにドイモイによる市場経済の浸透で、家族も大きく変容している。最近では、農村から都市への単身出稼ぎや家を挙げて離農する挙家離村が急増しており、そのインパクトについてベトナム人研究者による調査研究成果がだされている。残念ながら日本人のものや和訳されたものはまだほとんどないといえる。伝統的に商売に従事するなど旺盛な経済活動意欲をもっていた北部ベトナムの農村女性たちはドイモイによって一斉に農外活動を始めた。都市に出稼ぎに出た女性たちの仕送りが村の家族にどのような影響を与えるのか、女性を欠いた村落社会がどのような変容を遂げているのか、今後の研究が待たれるところであろう。

5. ジェンダー

ところで、以上のような社会変動がベトナムの家族に与えたインパクトをジェンダーの視角から捉えるとどのようなようになるであろうか。

ブー [1996] は、ベトナムが社会主義国家となり男女平等的な政策や法的保障を実施した結果、女性の社会進出が大きく促進されたと論じている。中国同様、儒教的な家父長制社会から社会主義体制へ移行した北部ベトナム（ベトナム民主共和国）では、女性の労働力を国家建設のために積極的に動員する必要から、女性の社会進出は国家からも歓迎され、男女間の賃金格差もあまりなかった。しかしそれは裏を返せば、瀬地山 [1996] が指摘するように、夫婦合わせてようやく生計が成り立つように社会システムが設計されていたといえる。父系血縁集団を存続させる規範が資本主義システムのなかで「男は外、女は内」という性的役割

分業を固定化させるのに働いたことで、男性の権限がより強化された日本や韓国とは異なり、中国や北部ベトナムでは「主婦」が生まれる素地が形成されなかった。ベトナム内外のジェンダー研究者は女性の社会進出や家計への貢献度を基準にベトナム女性の地位の高さを主張するが〔ブー 1996〕、それはいわば客観的事実からいえることであって、女性たちの主観的内在的論理からみれば、そうせざるを得ない状況でシステムに適応したにすぎず、女性の意識の変化や自立といった主体的な「女性解放」を目指したとは思えない。このような家父長制原理と社会主義の関係についてはステーシー〔1990〕に詳しい。それを受けて岩井〔1995〕は、女性の社会進出および経済的自立が達成されても、家族・親族内での女性の立場、母・嫁・娘という役割に縛られ続けるかぎり、すなわちその意識を再生産する儒教的規範から解放されないかぎり「女性解放」が達成されないのではないかと述べる。

一方、フランス植民地以来階層格差が著しく大きく、資本主義システムが機能してきた南部ベトナム社会はどのように捉えられるだろうか。全体的に日本のベトナム研究が北部に集中していることとも関連するが、家族に関する南部ベトナム（ベトナム共和国時代）の先行研究はほとんどない。しかし、瀬地山の家父長制と「主婦」の議論、すなわち性的役割分業が女性の経済的自立を阻んでいるという論理でいえば、韓国や台湾の事例からその家族の姿を部分的にでも類推することもできるだろう。上記の地域に比べ儒教的規範がそれほど強くなく、父系血縁集団の原則は維持しつつも実態的には双系的な南部ベトナム社会は都市と農村の格差が極めて大きく、それがそのまま階層格差にも連動している。その意味では韓国的な性別役割分担の機能をもつし、一方では母役割意識が希薄な台湾的な社会的特徴をももっているように考えられる。

6. 終わりに

以上、評者の関心に沿って、ベトナムの北部社会と南部社会における家族・親族の特徴と社会変容について述べてきた。親族の用語 1つとっても、北部社会で一般的に使われるゾンホdong h は排他的な父系血縁集団を意味するのに対し、南部社会で使われるバーコンba conは家族圏を表す双系的キンドレッドを意味しているように、南北の違いはベトナム語表現にも表れている。

さらに、社会主義化と資本主義化のインパクトは双方の社会と家族をさらに異なる構造へと変貌させたといえよう。ベトナム南北社会を構造的に捉え、それぞれの家族の何を変え、何を変えなかったのかという問題を比較考察することが評者の最大の問題関心であるが、本論ではその問題の所在を指摘することに止め、自身の今後の課題としたい。

<<参考文献>>

岩井美佐紀

1995「家族と社会主義」桜井由躬雄編著『もっと知りたいベトナム第2版』弘文堂.

1999「ベトナム北部農村における社会変容と女性労働ーバックニン省チャンリエット村の事例からー」京都大学東南アジア研究センター『東南アジア研究』.

渋谷節子

2000「メコンデルタ・カントー省の家族と社会：農村の家族生活の概観を中心に」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』2, 風響社.

嶋尾稔

2000「19世紀ー20世紀初頭北部ベトナム村落における族結合再編」末成道男他編『<血縁>の再構築ー東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社.

末成道男

1999「ベトナムの父系集団ーハノイ近郊村落の事例よりー」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』1, 風響社.

ステーシー, J. (秋山洋子訳)

1990『フェミニズムは中国をどう見るか』劉草書房.

瀬地山角

1996『東アジアの家父長制ージェンダーの比較社会学』劉草書房.

中西裕二

1999「世帯を通して見たベトナム南部村落における親族の位置づけ」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』1, 風響社.

ブー・ティ・ミン・チー

1996「変わるベトナム、変わる女性」関啓子他編『ジェンダーから世界を読む』明石書店.

水野浩一

1981『タイ農村の社会組織』創文社.

宮澤千尋

1999「ベトナム北部の父系親族集団の一事例ー儒教的規範と実態」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』1, 風響社.

ベトナムの家族に関する図書文献リスト

1998

竹沢尚一郎『アジアの社会と近代化：日本・タイ・ベトナム』日本エディタースクール出版部

中野亜里『ベトナム：「工業化・近代化」と人々の暮らし』三修社

末成道男『ベトナムの祖先祭祀：潮曲の社会生活』東京大学東洋文化研究所

2001

川上郁雄『越境する家族：在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店

2003

黒田学ほか編『胎動するベトナムの養育と福祉：ドイモイ政策下の障害者と家族の実態』文理閣

ベトナムの家族に関する報告書および論文文献リスト

1987

鮎京正訓「ベトナムの婚姻・家族法」『法律時報』

鮎京正訓「ベトナム憲法における婚姻・家族—新婚姻・家族法草案を中心として」

『岡山大学法学会雑誌』

1994

高岡弘幸「ベトナム北部方言における親族名称と呼称」『南方文化』

1995

岩井美佐紀「家族と社会主義」桜井由躬雄編『もっと知りたいベトナム』第2版、弘文堂

1996

ブー・ティ・ミン・チー「変わるベトナム、変わる女性」関啓子ほか編『ジェンダーから世界を読む』明石書店

1998

中西裕二「世帯を通して見たベトナム南部村落における親族の位置づけ」『東洋文化』

末成道男「ベトナムの父系集団—ハノイ近郊村落の事例より」『東洋文化』

ショーン・マラーニー「北ベトナム村落生活における婚姻の社会主義改革の結果」

『東洋文化』

1999

岩井美佐紀「ベトナム北部農村における社会変容と女性労働—バックニン省チャンリエット村の事例から—」『東南アジア研究』

宮澤千尋「ベトナム北部の父系親族集団の一事例－儒教的規範と実態」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』1, 風響社

2000

渋谷節子「メコンデルタ・カントー省の家族と社会－農村の家族生活の概観を中心に」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』2, 風響社

宮澤千尋「ベトナム北部の父系出自・外族・同姓結合」末成道男他編『〈血縁〉の再構築－東アジアにおける父系出自と同族結合』風響社

嶋尾稔「19世紀－20世紀初頭北部ベトナム村落における族結合再編」末成道男他編『〈血縁〉の再構築－東アジアにおける父系出自と同族結合』風響社

赤塚俊治「ベトナムの児童福祉の現状と課題－ホーチミン市における要保護児童の実態調査を踏まえて」『東北福祉大学研究紀要』

ル・ティ・ナム・トゥイエ「変革期におけるベトナムの女性と家族」『アジアの経済発展と家族およびジェンダー』（アジア女性交流研究フォーラム）

2001

川上郁雄「越境する家族－在日ベトナム人のネットワークと生活戦略」『民族学研究』
タイン・ファン「越南における母系制度と相続－チャム族とエデ族の事例比較」ベトナム社会文化研究会編『ベトナムの社会と文化』3, 風響社

赤塚俊治「ベトナムにおける要保護児童の社会福祉支援策の現状と課題－ホーチミン市の障害児を中心として」『東北福祉大学研究紀要』

2002

萩原修子「ベトナムのドイモイ政策下における家族－メコンデルタ・ヴィンロン省の『新生活建設運動』を中心に」『A P C アジア太平洋研究』

赤塚俊治「ベトナムにおける児童福祉の現状と課題(2)－農村における要保護児童の実態調査を踏まえて」『東北福祉大学研究紀要』

2004

赤塚俊治「ベトナムにおける高齢者福祉の現状と課題－『ドイモイ』政策と社会支援システムを踏まえて」『東北福祉大学研究紀要』